

カンボジアの農民が動き出した -- 農村開発プロジェクトをととした農民のエンパワメントの事例から (特集 エンパワメント再考)

| | |
|-----|--|
| 著者 | 功能 聡子 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 120 |
| ページ | 14-17 |
| 発行年 | 2005-09 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00005627 |

特集

特集／エンパワーメント再考

カンボジアの農民が動き出した―農村開発プロジェクトをおした農民のエンパワーメントの事例から

功能聡子

●はじめに

カンボジアを訪れた人は、その農村風景に心を奪われる。雨期、カンボジア中央の平野部では青々とした水田が広がり、やしの木と水牛が、田園風景にカンボジアらしさを添える。カンボジアの人口一三〇〇万人のうち八五%以上が農村地域に住み、七五%は米作りを主とする小規模農家である。しかしながら、カンボジアの人口の約三六%は貧困ライン以下と見られ、貧困世帯の九〇%が農村地域に偏っていることから、農村部での貧困削減はカンボジア政府の重要な開発目標となっている。政府は、貧困削減戦略および第二次社会経済開発計画において、農業生産性の向上を目標に掲げてきたが、目覚ましい成果は上っていない。

本稿では、二〇〇三年より国際協力機構（JICA）のNGO連携事業、コミュニティ・エンパワーメント・プログラム（旧開発福祉支援事業）の中で実施中の「小規模農民生活向上プロジェクト」を事例としてとりあげる。対象地域であるタケオ州トラムコック郡の全世帯の約一〇%にあたる

三〇〇世帯を超える農民がプロジェクトに参加し、生態系農業技術の導入と改良により、農業生産性の向上に成功している。小規模農民への支援がいかになされたか、誰がどのようにエンパワーメントされたのかを以下に見てみたい。

●目的と成果

プロジェクトの目的は、農業技術の改善と農業経営の多角化を通して、小規模農民の生活向上を図ることである。具体的には、①タケオ州トラムコック郡の全世帯の約一〇%にあたる農家三〇〇世帯が五〇%の収入向上を達成すること、②農民組合が結成され、郡レベルで農民組合連合ができること、を目標としてプロジェクトは開始された。

二〇〇四年に実施された中間評価では、プロジェクト対象地域の農民一一〇人に対してアンケート調査を実施した。その結果によると、プロジェクトに参加した農民は、稲作、野菜栽培、畜産、養殖などの技術改善により、プロジェクト開始時のベースライン調査の結果と比較して、平均七三%の

収入増を報告している。また、化学肥料や農薬の使用の削減、種もみの使用量の減少、人件費の削減などにより、平均して六九%のコスト削減を報告しており、経済的なメリットが実感されている。

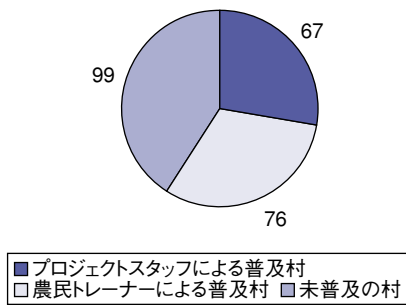
農民組合は、プロジェクト対象地域で六三組合が結成され、メンバー数は一五二二人、貯蓄高の合計は、三五三五万六五〇〇リエル（約八八〇〇ドル）である。

農業収入の改善に関連して、プロジェクトにより導入された農業技術が農民の間でどの程度実践されているのかを表1に示す。

●農民同士の普及活動

カンボジアでは、近年、生産性向上の名目のもとに化学肥料、農薬などの使用が急速に進み、農家の経済的負担を増加させていることが問題となっていた。そこで、プロジェクトは、持続的な農業の推進と自立の促進を活動の大きな柱として掲げ、現地のローカルNGO、CEDAC（Centre d'Etude et de Développement Agricole Cambodgien）を実施団体とした。CEDACは、

図1 普及活動の広がり



(出所) 参考文献③。

生態系に配慮した農業技術の開発と普及を推進する団体だったからである。しかし、新しい技術の普及は容易ではない。プロジェクトは、徹底的な農民同士の普及手法の採用により、壁を乗り越えようとした。まずプロジェクト開始時の説明会には、すでに新しい技術(生態系に配慮した農業技術)を導入している農民を招き、実際の体験談を話してもらった。さらに、各村数名の農民に対して、他地域の先駆的な農家の農場見学の機会を与えた。見学後、稲のSRI農法(System of Rice Intensification)一九八〇年代にマダガスカルで開発された稲の疎植栽培法の一つ、自然養鶏複合的な農園改良などを自分の農場でも応用してみる農民が現れた。SRI農法は、通常だと四〇日以上生育した稲を数本まとめて密植するところを、わずか一五日ほどの幼苗をそれも一本か二本づつ、二五〜三〇センチほどの間隔で田植えするのである。田んぼには弱々しい苗がまばらに並び相当みすばらしく見えて、村の人からばかにされたそうである。しかし水の管理や雑草に注意しながら数週間たつと、しっかりと根をはり、十分に枝分かれした力強い株となり、数カ月後には豊かな稲穂が実ったのである。通常の一五〇%以上の収穫に、隣近所の農家以上に本人はびっくりして、翌年にはこの新しい技術で栽培する面積を増やし、まわりの農家にも自信をもって伝えるようになった。プロジェクトは、このよう

表1 プロジェクトにより導入された農業技術の普及状況

| 項目 | 数 |
|-----------------------|-------|
| 研修のレギュラーメンバー農家 | 3,315 |
| SRI 農法を実践している農家 | 2,181 |
| 家庭菜園の質の向上につとめた農家 | 240 |
| 自然養鶏を実践している農家 | 173 |
| 自然養豚を実践している農家 | 82 |
| 小規模養殖、水田での養殖を実践している農家 | 202 |
| 複合的な農園の改良を行った農家 | 40 |
| 堆肥の生産量を増やした農家 | 2,153 |
| 液肥を作り野菜栽培に使った農家 | 186 |
| 改良かまどを設置している農家 | 253 |
| 植林活動に参加している寺 | 6 |
| 植林のための苗床を作った村 | 48 |
| 植樹本数 | 9,720 |

(出所) 参考文献③。

(注) 本プロジェクトに対する JICA の支援は 2003 年 1 月に開始されたが、プロジェクトの構想はその 2 年前、2001 年に始まっており、実施団体となる現地のローカル NGO は 2001 年 7 月より数カ村で活動を開始した。

な農民自身の実験を奨励した。農家は学んだことを実験し、その成果を他の農民たちに伝えることを、自然に身につけていった。さらに農民グループの中で、リーダー格の人材としてキーファーマーに選ばれた農民は、グループを組織し他の農民たちを指導することができるようになっていった。農民の中には、自分の村だけでなく、他の村の農民に対する普及活動にも積極的に取り組む人が現れた。プロジェクトは、彼らを農民トレーナーと位置づけ、他の村への普及活動を支援した。プロジェクトの事務所では、農民トレーナーがやってきて、スタッフにあれこれ質問したり、事務所にある様々な資料を利用したりする姿をよく見かけた。現在、農民トレーナーは二九名おり、七六カ村で普及活動を行っている。プロジェクトスタッフが直接関与している村六七カ村と合わせて、計一四三カ村に、プロジェクトの波及効果は飛躍的にのびている(図1)。

エンパワーメントの過程は、いくつかの気づきと、成功体験をもとにした新たな活動への展開の連続によって成り立っている。たとえば、自分の農業と他者の農業を比較する機会を得て、新しい技術や情報へのアクセスを得たとき。学んだ技術を自ら実験し、自分のものとして獲得したとき。技術と成果を他者と共有したとき。キーファーマーや、農民トレーナーという明確な役割を与えられ、新しい能力(リーダーシップ、

組織化など)を獲得し、獲得された能力を発揮する場(農民グループ、他村への普及活動など)を得たとき。そして、農民がエンパワーメントされた結果として、プロジェクトの波及効果の広がりがあつた。

こうした展開は、プロジェクトスタッフによる、丁寧なモニタリングと適切なアドバイスによって支えられている。農民は、スタッフと定期的な彼らの農場を訪問し、必要な助けを与えることに強い信頼感を抱いている。一回限りの研修や普及活動しか行つてこなかった他の NGO や援助団体とは違う、と農民たちはスタッフを高く評価している。

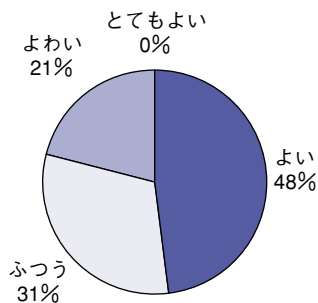
●農民組合の結成

カンボジアでは、内戦時代の経験から組合組織というものに疑心を抱く者も少なくない。カンボジア政府は、二〇〇一年に農協設立に関する政令を制定したが、政府の主導で設立され認定された農協の数は全国で一〇余りにすぎない。

一方、本プロジェクトでは、プロジェクト目標の一つである農民組合の設立数は、一年目で四〇組合(組合員数二二七名)、二年目で六三組合(組合員数二五二名)と順調に増加している。農民たちは、なぜ組合を結成しようとするのだろうか。

農民組合結成の目的を農民たちに聞くと、第一に農民の貧しさを解消するため、第二に減少しつつある自然資源を守るため、と

図2 トラムコック郡の農民組合の評価結果



(出所) CEDAC スタッフへのインタビューをもとに筆者作成。

農民組合の利点として農民自身が挙げているのは、他の団体によるマイクロクレジット(小規模信用貸付)のスキームと違い、資産が村の外に出ないで、農民組合の中で貸し借りできることである。それ以外の組合の利点として、女性が助け合う機会が増えた、SRI農法などの普及により収穫量が増加し、収入が増えたので村の外に出稼ぎにいかなくてすむようになった、他の村人がSRI農法で栽培した田んぼを見て質の高さを認識するようになった、自然養鶏の方法が上達した、自分たちの環境に気を使うようになった、堆肥を使うようになった、自分たちの農場や農業生産に対する自信が深まった、新しく得た知識や技術を隠したりしないで仲間同士で何でも分かち合

う答えが返ってきた。組合の活動としては、①貯蓄、クレジット、②農業、③環境、④積み立て基金、⑤青年、⑥女性、⑦共同購入、共同販売、⑧小規模インフラ施設建設、などが報告されている。特に農民が魅力を感じているのは、貯蓄、クレジット、積み立て基金などで、共同購入(砂糖、塩、うどんなど)や共同販売(鶏、豚など)への関心も高い。現在、ある農民組合のメンバーは、自分の組合が誇るものとして、農業に関する技術と経験、緊急時のための積み立て資金、協力関係、生態系農業を推進するという目標、を挙げた。自分たちの組織と活動に自信と誇りをもっていることがうかがわれる。

表2 農家組合の評価項目

| 評価項目 |
|---------------------------|
| 会計および活動報告 |
| 活動計画 |
| 戦略の有無 |
| メンバーの人材育成 |
| メンバー間の情報共有、プレゼンテーションの頻度と質 |
| イノベーション(新しい農業技術の開発) |
| 他のグループとの協力 |
| 共同購入の実績 |
| グループ活動の数(女性グループ、青年グループなど) |
| 地方行政との協力 |

うようになった、いいことや成果があがったりしたらミーティングの場で発表するようになった、仲間同士の連帯感が高まった、などの意見が出た。

ところで、プロジェクトが最初に対象にしたのは、プロジェクトに対して関心を持ち、実際に新しい技術を試してみようという意欲のある農民だった。この結果プロジェクトに参加する農民は、土地を持ち、新しい農業技術の習得に意欲的に取り組むことのできる層、つまり、村の中でも中程度以上の層に偏りがちだった。農民組合の結成目的として、農民の貧しさの解消を真っ先に挙げた農民たちは、自分たちの組合に最も貧しい人たちが入ってこないことに気づいていた。プロジェクトスタッフも、貧しい人は忙しくミーティングに来ることができないし、ミーティングに来て話したがらないのではないかと悩んでいた。しかし、自分たちのこのような思い込みが障壁になっていることに気づき、現状を丁寧に分析していくうちに、貧しい人たちの時間帯やニーズに合わせた研修を工夫するようになった。プロジェクトは、二年目から、最貧困層のグループ作りに取り組み始め、農民組合も、組合内に貧困層のためのグループを設けたり、緊急基金を設けて、組合員以外にも緊急時の資金供与を行うなどの活動を始めた。現在、一三の最貧困層のグループ(メンバー二五名)、一二の女性グループ(メンバー一八二名)、四つの青

年グループ(メンバー四九名)が活動している。

農民組合は、自分たちで議題を設定し、メンバーを招集して会議を開催することができるようになっていく。各組合は独自に規則を定めており、それを地方行政組織であるコミュニケーション協議会に承認してもらい、協力を得ている。また、プロジェクトスタッフによるモニタリングを受け、評価されている。評価の指標とトラムコック郡の農民組合の評価結果を示す(表2、図2)。

評価項目は、CEDACのスタッフにより作成されたものだが、これ自体がエンパワーメントの指標にもなっているといえよう。エンパワーメントにおいて、組織化過程の重要性が指摘されているが、ここでも例外ではない。農民たちは、農業技術の習得をエントリーパーポイントとして、協力関係の構築、経験の共有、農民組合の結成へと、その活動の場を拡大していった。さらに、農民組合の活動を通して、資源と情報へのアクセスを獲得し、組織や活動のマネージメントを学び、仲間との連帯関係を強化し、地方行政や寺、学校などと地域開発の課題に共同で取り組むようになった。農民組合は地方行政から承認され、農村社会の中でひとつの役割を与えられつつある。また、農民組合は最貧困層への取り組みを通して、「自分たちよりさらに貧しい人」との間で新しい関係を築きつつある。農民組合の活動を通して、農民たちは自らが属する社会



新しい農業技術が書かれた雑誌に見入る農民たち（写真提供：CEDAC）



農家訪問。実践農家の話に熱心に聞き入る農民たち（写真提供：CEDAC）

への関心と関与を深め、既存の社会関係を変えていく力を獲得しつつある。

●まとめ—さらなる展開

農民たちが自信に満ちた態度で、プロジェクトの成功と将来への展望を語るのを見て、政策策定に関わる人間も少なからぬ影響を受け始めている。カンボジアの農林水産省内で、SRI農法に関するワーキンググループが設置されたり、閣僚評議会の一機関である農業・農村開発評議会が、生態系農業を積極的に推進するなどの動きは、その一例である。無力だと思っていた自分たちの実践が、大きな動きにつながることを実感した農民たちは、農民組合の活動にも以前に増して積極的に取り組むようになった。農民たちは、全国レベルの農民組合連合組織を結成し、農民の声を政府に届けるアドボカシー（政策提言）活動も開始した。彼らは、いまや短期的な収入向上だけでなく、カンボジアのWTO加盟による農業分野への影響など、社会的、長期的な課題にも関心を持ち、勉強するようになってきている。また有機農産物の市場開拓、紛争解決、NGOからの自立など、将来に向けての課題についても検討を始めている。プロジェクトの基本姿勢は、農民の持つ力を信頼し、自立を促すことである。旧来型の普及活動は、普及員が種や化学肥料を配るだけで終わってしまうので持続せず、むしろ農民を依存的にするマイナス作用も

あるとの反省から、このプロジェクトではあくまで農民が重要だと感じていることを尊重する、コミュニティが自分たちで行動を起こすことを支援する、というアプローチをとり、結果的に、農民たちの意欲と能力を引き出すことに成功している。農民同士の普及活動により、多くの農民が新しい技術を習得したし、教える側の農民は、自分たちの実践を確認し、自信をもって伝える側に立つようになった。また、彼らは、村の中で弱い立場に置かれていた貧しい人々たちへの具体的な働きかけを始めたり、植林活動を始めるなど、自分たちを取り巻く社会や環境に関心を持つようになり、自分たちの権利と社会を守るために、自ら声を上げる機会を獲得するようになった。農民たちは、自らの力に気づき、それを発揮するというエンパワメントを達成した。しかし、実際には、ある時点でエンパワメントが達成された、という評価は、暫定的なものにすぎない。なぜなら、すでに見てきたように、一つの気づきが新しい活動を生み、その活動の成果が次の活動の動機付けになる、という連続的な「展開」こそが、エンパワメントではないかと考えるからである。また、エンパワメントの結果として、一つの活動が周囲に影響を及ぼして広がっていく「波及」効果も無視できない。本稿では、農民たちがプロジェクトを通していかにエンパワメントされたかに焦点をあて論じた。しかし、本プロジェクト

で働く若いNGOスタッフが、農民と共に働くなかでエンパワメントされ、成長していった点も忘れてはならない。筆者自身このプロジェクトに関わる中で多くの刺激を受け、農村開発支援のあり方について新たな示唆を与えられた。支援される側だけでなく、支援する側も、相互に成長するところにエンパワメントの本質があると考ええる。この点に関しては、また別の機会に論じたい。

（このあとこゝろいりあい・よりあい
・まなびあいネットワーク）

『付記』筆者は、二〇〇一年より二〇〇五年までカンボジアにおいてJICA企画調査員として本プロジェクトに関わった経験をもつが、本稿は筆者個人の見解であり、文責は筆者にある。

《参考文献》

- ① 佐藤寛編『援助とエンパワメント』アジア経済研究所、二〇〇五年。
- ② Kim Tran, Yi, et al, *Annual Report: Improving Livelihood of Small Farmer in Thme-kok: A Sustainable Solution for Rice Farmers*, April 2003-March 2004, CEDAC, 2004.
- ③ Kim Tran, Yi, et al, *Annual Report: Improving Livelihood of Small Farmer in Thme-kok: A Sustainable Solution for Rice Farmers*, April 2004-March 2005, CEDAC, 2005.